

同窓生シリーズ

14



第10回生 片岡玲子氏

昭和33年卒業・旧姓吉永。昭和37年東京教育大学心理卒。同年東京都庁に入る。東京都中央児童相談所・品川児童学園長・品川区厚生課長・教育庁体育部給食課を経て平成2年教育庁総務部法務監察課長。著書「今日から叱らないお母さん」(共著)、「老人福祉論」(共著)誠信書房

本が与えられ、試験があり、成績が悪いとクラスがえする。生徒のほうも真面目な人は本がケバ立つ程やっています。私は友だちと試験前日に本屋へ行き翻訳本を探してきて、二人で徹夜で日本語のほうを読んだ思い出があります。でも先生がぎゅうぎゅうやれば生徒はそれなりに対応策を考える。というようにそんなに暗い雰囲気ではなかったです。服装は、男子は白線二本の帽子でかっこ良かった。ただ女子は赤い色を着てはいけないとよく言われました。気が散って男子の進学率が落ちるからという理由でしたよ。

今回は、二人のお子様を育てながら、都教育庁法務監察課長として活躍しておられる片岡玲子さんにお話を伺いました。

在校時代のこと

この学校を選んだのは家から近かったのと、男子校ですてきな先輩がいたからという単純な理由です。今と違って一クラスに女子が十人ぐらいという時代でした。

三年間、新聞研究部で朝陽時報を作っていました。また、文芸部に顔を出し、小説や詩らしきものを書いたりしていました。三年生の時には有志で学園祭に劇をやりました。

三年の参加は珍しかったんです。夏休みには、受験勉強より身を入れて劇の練習に学校に通った覚えがあります。私は受かったのですが、浪人した仲間もいましたね。でもみんな立派になられていますよ。

先生方は勉強しろなんてことはあまり言いません。生徒も自分のペースでやるとい感じます。あの頃は、浪人も含めて百人ぐらい東大へ入りました。勉強だけでなく、それにプラスして何をやるかでした。試験はしよつちゅうあった様に思います。次々に英語の副読

ちと試験前日に本屋へ行き翻訳本を探してきて、二人で徹夜で日本語のほうを読んだ思い出があります。でも先生がぎゅうぎゅうやれば生徒はそれなりに対応策を考える。というようにそんなに暗い雰囲気ではなかったです。服装は、男子は白線二本の帽子でかっこ良かった。ただ女子は赤い色を着てはいけないとよく言われました。気が散って男子の進学率が落ちるからという理由でしたよ。

女の子が二人います。上は二歳から下は一歳から保育園に入れました。意識がすくく強

ね。母親自身にも強い。良い母でなければならぬ。でも子供って時には憎らしいと思っても良いと思います。ポイントだけ大事にして、少し気楽にやったほうがお互いのために良いのではないのでしょうか。

現在の仕事のこと 堅い名称ですが教育庁の法務監察という、都立学校とか教育事業所などの運営がいろいろの面からみて、うまく行われていくかどうか確認したりアドバイスする仕事をしております。

これからは、男性も女性も社会に参加し、地域にも参加するという姿勢を持って生きて行く様にするれば、来るべき二十一世紀の高齢社会にもきつと対応して行くことができるでしょう。課題はたくさんありますが、そういうつもりで、みんな世の中のしくみを広く見なおしていただけたらと思います。